J. Soc. Powder Technol., Japan, **62**, 526–529 (2025)

日本を飛び出して感じた多様性と自由な考え方

The Diversity and Open-minded Thinking I Experienced Overseas

吉田 道之 *
Michiyuki Yoshida

1. はじめに

元同僚でもある名古屋工業大学の高井先生からお声掛けをいただき，本稿の執筆をさせていただくことになりました。「ダイバーシティ推進活動の紹介」という趣旨の企画ですが，私自身，ダイバーシティを訴えて具体的な活動をしているわけではないのですが，人からはよく，「自由な性格」と評され，ダイバーシティに通じる考え方を持っていると感じていただいたようなので，どのような経験を経て，今の考え方，価値観に至ったか，拙い文章で恐縮ですが，つれづれなるままに書いてみることにします。

2. 学生時代

私は，神奈川県の県立高校で高校時代を過ごしました。自由な校風で，部活動と学校行事が盛んなことで有名な高校でした。実際に入学してみると本当に自由で，一度しかない高校生活を思いっきり満喫してやろう，という雰囲気に満ち溢れている学校でした。球技大会や陸上記録会，合唱コンクールなど，クラス対抗で行われる学校行事が少なくとも月に一回開催されました。それぞれの行事の成績に応じてポイントが加算され，年間を通してもっとも高いポイントを獲得したクラスが最優秀クラスとして表彰されました。われわれの時代は 1 学年 12 クラスだったので，36 クラスの頂点に立つのは至難の技でした。それでも，その栄誉を勝ち取るべく，部活動が終わった後に皆で公民館に集まって夜遅くまで合唱の練習をしたり，早朝に集まって球技大会の練習をしたり…勉強に，部活動に，学校行事に，本当に忙しい学校生活でした。

学校行事の中で皆がもっとも熱狂するのは体育祭です。学生が主体となって企画・運営を行い，特に「仮装」と呼ばれる演舞が有名で，その完成度の高さから「日本一の体育祭」とも言われ，数年前にテレビ番組に取り上げられて話題にもなりました。この仮装に使う道具は，「すべて手作りのものを使うこと」，というルールが決められています。衣装も自分たちでデザインし，衣装に使う生地は病院で不要になったシーツを貰い受けて，真夏に染料を使って皆で染めました。仮装のシンボルとなる数メートルにもなる大きなハリボテも木材を買って，運んで，切って，削って，組み立てて，布を貼って…自分たちで作りました。本当に大変な作業でした（**写真 1**）。たった 10 分間の演舞を 1 年かけて準備するのです。個性あふれる面々が集い，皆で良い作品を作ろうと意見を出し合う過程で，時には喧嘩もありました。それでも，やり遂げた後の達成感と高揚感を忘れることはありません。個性が噛み合った時に生まれる爆発力と熱狂を経験することができ，人生で最初に多様性を感じた瞬間でした。

3. 自由旅行

大学に入学してからはサークル活動に熱中しつつ，友人の影響でリュックサックひとつ背負って世界中を旅行するようになりました。いわゆるバックパッカーです。バックパッカーの魅力はなんといっても自分で旅のテーマを決めることができることにあります。「古代遺跡を

写真 1　高校の体育祭で手作りの衣装を身にまとい，ワニの張りぼての前で記念撮影

2025 年 6 月 30 日受付
岐阜大学工学部 化学・生命工学科 物質化学コース
（〒 501-1193 岐阜市柳戸 1-1）
Dept. of Chemistry and Biomolecular Science, Faculty of Engineering, Gifu University
（1-1 Yanagido,Gifu 501-1193, Japan）
* 連絡先　yoshida.michiyuki.j7@f.gifu-u.ac.jp

巡る旅」「自然を満喫する旅」「現地の文化に触れる旅」などなど。旅のテーマに基づいて（財布の中身と相談しながら）スケジュールを大雑把に決めます。大抵の場合，日本で立てたスケジュール通りにはいかないので，現地で集めた情報をもとに目的地や移動手段を旅先で臨機応変に決めていきます。言葉がうまく通じない異国の地での情報収集や交渉はとても大変ですが，現地の人と接触する機会が多くなるので，パッケージツアーでは味わえないような体験をすることができます。日本では考えられないようなアクシデントも起こりますが，これも旅の醍醐味です。

大学院生の時に，エジプト，ヨルダン，シリア，トルコを陸路でおよそ一ヶ月かけて横断する旅をしました（**写真 2**）。この地域には沢山の遺跡があり，エジプトで印象的だったのは，やはりクフ王のピラミッドでした。想像を絶する大きさで，四千年以上の昔によくぞここまでの建造物が作れたものだなと…心の底から感動しました。ヨルダンではイスラエルとの国境付近にある死海で海水浴をしました。塩分濃度が 30％と高く，浮力が大きいので，どんな体勢でも浮くことができます。そのためか，水の上にプカプカと浮かびながら読書をしている人が大勢いました。不思議な光景でした。市場で買い物をする時に物の値段が決まっておらず，いちいち交渉しないと物が買えないことに，驚きました。最初は，なんて面倒くさいんだと思いましたが…すぐに慣れ，値段交渉以外の話もできるようになると，買い物が楽しくなりました。小さな子どもが親の仕事を楽しそうに手伝っていたり，こちらが困っている様子を見つけると，話しかけてくれたり，街は，活気があって人情味に溢れており，メディアを通じて感じていたイスラムの国の印象とは大きく違っていました。

南米のペルーでは，セスナに乗って上空からナスカの地上絵を見ました。地上絵は地面に溝を掘って描かれているため（轍のような浅い溝），太陽が頭上にある日中は影ができず見えませんが，日が傾く朝もしくは夕方になると，その姿を現します。地上絵が描かれている土地に車で侵入する人たちがいるという話を聞き，残念に思いました。地上絵は単なる轍なので車が通ると簡単に消えてしまうからです。ジャングルの奥地に聳える山の頂に建造された空中都市「マチュピチュ」も素晴らしかったです（**写真 3**）。船が航行可能な湖で，もっとも高所にあるチチカカ湖の水上で生活している人々の村も訪れました。通貨を使わず物々交換で生活をしていて，一生，陸に上がらない人もいると聞いて驚きました。日本や，先進国の人々とはまったく異なる価値観で生活しており，それでも皆，幸せそうに見えました，

旅行に行くと，その国に対して抱いていた印象は大きく変わります。私は旅番組が好きなのですが，実際に現地に足を運んでみると，メディアを通じて見聞きした情報がいかに断片的であるかということを思い知らされます。もちろん，旅行のような短期間の滞在ではその土地のことを深く知ることはできませんが，日本は広い世界の一部で，世界にはいろいろな価値観，生き方があるんだなと，旅行を通じて初めて知ることができました。

4. 研究者になってから

学生時代に経験したことや出会った人の影響で，人生は長いし，人と違った道を行ってもいいのかな，という気持ちになり，就職活動は行わず研究者の道に進みました。ほとんどの同級生が就職して働いているのに自分はまだ学生で，就職氷河期真っただ中だったこともあり，この先，研究職で生きていけるのか，不安になることもありました。それでも，考えても答えが出ないことに悩んでも仕方ないなと気持ちを切り替え，目の前のことを楽しもう，というメンタリティーで日々を過ごすようにしていました。

博士課程を卒業して，しばらくポスドクをやりましたが，この間，JSPS の制度を利用して，スペインのセビリア大学に 2 か月間，留学する機会をいただきました。海外に住む，というのが初めての経験だったので，さすがに最初は心細かったです。私がお世話になった研究室は物理学科に属していましたが，メンバーの半分くらいが女性でした。日本では考えられません…彼らは，普段はスペイン語を話すので，会話の内容がよくわからな

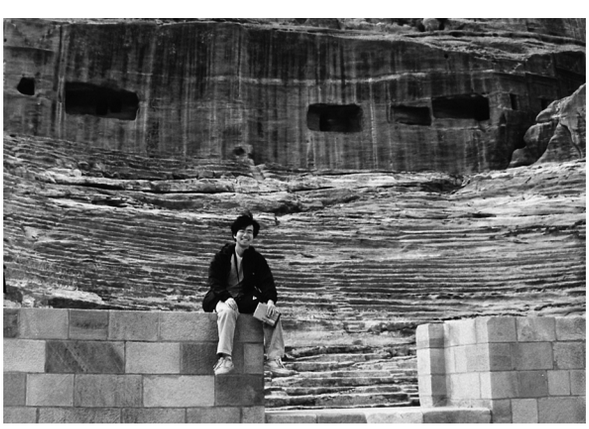

写真 2　映画「インディージョーンズ」のロケ地にもなったヨルダンのペトラ遺跡にて

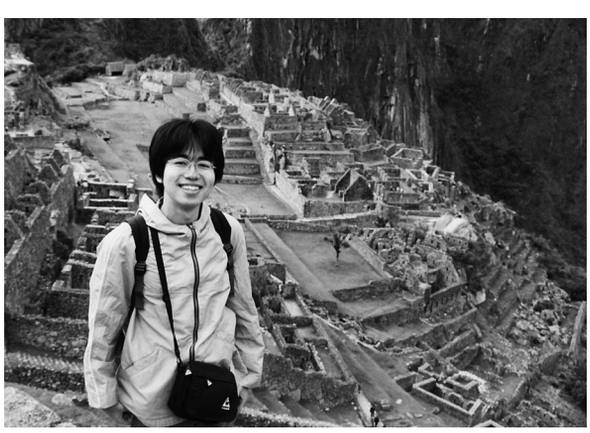

写真 3　インカの空中都市，マチュピチュにて記念撮影

写真 4　ランチや映画を一緒に楽しんだセビリア大学のメンバー

写真 5　オックスフォード大学でお世話になった Todd 先生とパブにて

かったのですが，それでも，毎日，研究室の皆とお昼ご飯を食べ，毎週末開かれる飲み会にも行きました。私が心細そうにしているのを察してくれたのか，彼らが映画に誘ってくれました。山田洋次監督で，キムタク主演の「武士の一分」でした。私は日本語で，彼らはスペイン語の字幕で内容を理解しました。映画の後，皆で飲みに行き，映画の話で盛り上がりました。これをきっかけに，いろいろな話ができるようになりました。マイノリティとして生活する初めての経験でしたが，周囲の小さな気遣いで，本当に救われるんだなと…心の底から感じることができました（**写真 4**）。

大学の教員になって間もなく，一年間，イギリスに留学する機会をいただきました。留学先は，現存する大学としては世界で 3 番目の古さを誇るオックスフォード大学です。オックスフォードの街は，カレッジや図書館などの厳かな建物が点在しており，中世にタイムスリップしたかのような気分になれる素敵な雰囲気の街でした。多種多様な人種や価値観が共存する環境で研究を行った経験は，何物にも代え難い財産となりました（**写真 5**）。留学してすぐに，指導教員のところに研究の相談に行ったのですが，そこでまず，度肝を抜かれました。これから私が取り組む研究テーマ（電場をかけながら粉末成形体の焼結を行う，フラッシュ焼結）について，紙と鉛筆

写真 6　街が遊園地になるオックスフォードの St Giles' Fair

を使って，サンプルを作るところから，装置の仕組み，焼結のメカニズムを事細かに説明してくれたのです。実験装置も手作りのものが多かったです。装置のセットアップを一緒にやってくれた学生さんは，壁に設置してある電源に，実際に何ボルトかかっているのか，マルチメーターで測定するところから始めました。学生も教員も皆，よく考えていて，なぜ？を大切にする気質を感じました。だからこそ，少しでも予想と違う結果が実験で出ると，それに気づくことができ，新しい発見につながるのです。また，毎日 11 時から 15 分間，ティータイムがあることにも驚きました。これは，半強制的で，仕事をしていると中止を促され，カフェテリアに連れて行かれ，皆でお茶を飲みました。研究室の垣根を越えていろいろな人に会えるので，これはいい制度だなと感じました。労働時間もビックリするほど短く，家族の用事で仕事を中抜けする人も，けっこういました。それでも仕事が回るのは，分業が進んでいるからなんだなと感じました。

イギリス国内にはフットパスと呼ばれる歩行者用の小道が網の目のように張り巡らされています。美しい景観のクライストチャーチメドーとポートメドー周辺のフットパスが，オックスフォードでの筆者のお気に入りのジョギングコースでした。ジョギング中に，3 世代家族でワイワイお話しながら散歩している光景をよく見かけました。クリスマスの時は，みんなでサンタクロースの帽子をかぶって談笑しながら散歩している家族もいました。イギリスの方は，散歩をこよなく愛しているようでした。夏になると，オックスフォードの街が遊園地になります（**写真 6**）。St Giles' Fair というお祭りで 17 世紀始めから続いているそうです。もともとはキリスト教のお祭りだったそうですが，18 世紀に toy fair になり，19 世紀末に現在の遊園地スタイルになったそうです。子どもたちだけでなく年配のご夫婦もメリーゴーランドに乗って大はしゃぎしたりして，素敵だなと思いました。自分の住んでいる街が遊園地になってしまうなんて，子どもたちにしたら夢のような出来事です。人生を楽しむことを，本当に大事にしているんだなというのが伝わってきました。

写真 7　イギリスで最も歴史ある銀行の一つロイズ銀行のロビーをお借りして開催された母校の同窓会

写真 8　個性豊かな研究室のメンバー

世界各国の金融機関の建物が立ち並ぶロンドンの金融街「シティ」には，多くの日本人が働いています。シティで働く母校の同窓生が中心となって設立された同窓会のロンドン支部に参加し，同窓生との親交を深めることができました。同窓会での一番の思い出は，語学研修で訪英中の現役の高校生たちと英国在住の OB・OG との交流会でした（**写真 7**）。交流会は，ロンドン中心部シティのロイズ銀行本店で行われました。体育祭や部活動など，共通の話題が多いこともあり，現役生と卒業生の交流会は思いのほか盛り上がりました。高校生の頃から世界に目を向けているなんて，この子たちは，本当に頼もしいなと感じました。日本を遠く離れた異国の地での現役生との交流は一生の思い出です。

5.　さいごに

研究室には毎年，新しい学生さんが配属されます（**写真 8**）。私は，込み入った研究の話をする前に，これまで，自分が経験してきたことを話し，彼らが何に興味を持っているのか聞くように心がけています。学生さんと話をすると，多種多様な考え方を持っていることがわかります。日本を飛び出して「多様性」についての「気付き」を得ましたが，多様性は，身近な問題なんだなと感じています。「ダイバーシティ推進活動」と呼べることを，自分がやっているとしたら，「まずは自分を大切にすること。次に，いろいろな考え方があることを，身をもって知ることが大事で，その結果として他者への寛容的な姿勢が生まれる。働き方に関するルールや規則は，そこにいる人と，仕事の内容によって変わるので，皆でよく話し合って自分たちのやり方を追求すればいいんじゃないの？」と…若い人に伝えていることでしょうか。

次は栗本鐵工所の周藤雅美様にバトンをお渡しいたします。